



「下村満子の生き方塾」ニュース

Vol.14 2017.10

—Ⅶ期修了Ⅷ期入塾式特集号①—



激動の時代、生き抜く誓いも新たに



決意も新たに入塾式に臨む新入塾生たち

「下村満子の生き方塾」は4月22日、東京・音羽の鳩山会館でⅦ期修了式とⅧ期入塾式を開きました。「あつまる」の若手社員14人はじめ福島県大熊町議、ヨークベニマルの女性幹部5人ら新入塾生25人、応援団も含めて80人が出席し、激動の時代を生き抜くため、心を高める学びと実践に向け、誓いを新たにしました。(文責・皆川 猛)

塾長開会あいさつ

●心を高める生き方をしよう

佐久間広幸塾生の司会で開会した修了・入塾式では、初めに、下村満子塾長が「坐禅は心の柔軟体操と思えばいいです。波立つ心を、呼吸を整えることによって、平らかにすることです」と、坐禅の基本について説明。遠藤正志塾生が点鐘し、10分間の坐禅を行いました。篠原塾生のリードで塾生五訓を唱和した後、下村塾長が次のように挨拶しました。

—今年も鳩山会館を使わせていただき、Ⅶ期修了式とⅧ期入塾式を開いていますが、この塾も開塾7年目に入りました。ということは、私は7歳ほど歳をとったことになり、その分だけあの世に近づいたわけです。若い人が多数入塾し、ワクワクしながら今日を迎えました。

この塾は、人生と真正面から向きあう、いま風の人からみれば“ダサイ塾”です。今世界は激動の時代に入り、日本はじめ世界は悪い方向へ向かっている気がしてなりません。価値観が大混乱しているから、どう生きればいいのか

迷う人も増え、てっとり早い生き方として、損か得かで動く人が多くなっています。だからこそ、ぶれない自分の基軸を作ることには大きな意味があり、『生き方塾』はこの「ぶれない基軸」作りを皆と一緒に学ぶ場でもあります。

いつから生き方について考えるのがいいのか。若い時から考えれば、これから先の人生にとっての道しるべになり、とても得だと思いますが、年齢を重ねてから考えても決して遅くはありません。「How to die.」いかに死ぬかは、「How to live.」いかにして生きるかとの裏表の関係にあり、死に方は、その人の人生の決算書なのです。人を貶めて生きてきた人、自分の利益のみを追求して生きてきた人など、いい生き方をしてこなかった人は、それに応じた死に方しかないのです。

これから皆さんと一緒に、「心を高める生き方」を学び合いましょう！—

塾長挨拶の後、総代の小野浩喜塾生に下村塾長から修了証書が授与され、引き続き皆勤塾生に皆勤賞、塾長から豪華副賞が贈られ、受賞者たちは塾長からの素敵な副賞に大喜びでした。「Ⅶ期も皆勤賞を目指し、勉強会に出席したい」と喜びを語りました。受賞者は次の通り。

◇フルコース ▽皆勤賞＝三浦由紀子（福島市）皆川猛（同） ▽準皆勤賞＝原田まり子（会津若松市）、大野一彦（東京）千田利雄（同） ▽準々皆勤賞＝伊東優子（福島市）佐々木慶子（同）狐塚裕子（東京）◇福島コース ▽準皆勤賞＝遠藤正志（本宮市）西牧典子（石川町） ▽準々皆勤賞＝長島和美（郡山市）熊耳雅弘（同）◇東京コース ▽皆勤賞＝篠原陽子（東京）元谷晶子（同） ▽準皆勤賞＝安斎隆子（郡山市）山本亮二郎（神奈川県）

引き続いて 25 人の新入塾生一人ひとりが、決意を表明し、菅野寿男、阿部洋子、常松景子の塾生 3 人が、「この塾は楽しい塾です、一緒に心を高めるために頑張りましょう」と歓迎のあいさつをしました。

この後、開塾以来 6 年間という長きにわたって「生き方塾」を支えてくれた事務局の三田公美子事務局長、長沼美江事務局スタッフに感謝の花束と記念品が遠藤正志、林田宗士塾生から贈られました。三田さんは今後副塾長に就き、後任事務局長には伊東優子塾生が就きます。

新入塾生の入塾動機は次の通りです（敬称略）。

・菅野和佳子…塾生の母と兄から「生き方塾」の素晴らしさを聞いており、興味を持っていました。知識を学ぶだけでなく、心を高めて利他の心を養うという塾長の考え方



修了証書を授与される総代の小野さん



皆勤賞と豪華副賞を受け取る三浦さん



準々皆勤賞の長島さん



6年間事務局長を務めた三田さんに感謝の記念品



事務局を支えた長沼さんにも感謝の花束



今期から事務局長に就いた伊東さん

に感銘を受け、これは自分がこれから生きていく上での課題と同じです。一緒に学びたい。

・熊谷美紀…日々の生活では、自分と社会の関わりや将来について深く考えることはなく、知らないことがとても多いと思います。勉強する機会をいただき、様々なことを学びたい。

・木幡ますみ…佐々木慶子さんに「生き方塾」を紹介され、しっかり学びたいと思いました。3・11 原発事故被災者として「心の復興と自立」を目指し、頑張っていく覚悟です。

・白鳥則生…還暦を迎え、自分を見詰め直し、これからの生き方をどうしたら良いのか、思いを巡らしています。現場から身を退く立場となり、自分ができること、お手伝いできることを何か、など社会とのつながりを持ち続けたいと願い、入塾しました。

・孫紅…下村塾長は素晴らしい方で、私の恩人でもあり、大変尊敬しています。塾長の素晴らしさの原点である「生き方」を学び、社会そして多くの方に恩を返したいと思って入塾しました。

・田村里佳…看護師としてたくさんの人生を見てきました。これからもたくさんの人に寄り添っていきたいと思います。他人の生き様を支えるには、自分の死生観や価値観を考える必要があります。「生き方塾」では真剣に学びたいと思います。

・中島好美…塾長とは長い付き合いで、考え方も似ている部分もあります。アメリカン・エクスプレスはリタイヤしたので、「生き方塾」でしっかり勉強したいと思います。

「株あつまる」の皆さん

・石井陽介…塾長の無償の利他心を学びたい。

・植松里菜…郡山で初めて塾長に会い、その後弊社で講演してもらいました。話に感銘を受けたので、直接学びたいと思いました。

・亀井愛美…塾長が弊社で講演した際の話に、心が震えました。生きるとは何か、いのちとは何かをもっと考え、自分のできることをやっていきたいと思います。

・木原大輔…塾長の弊社での講演の際、話していた「人として正しい生き方を追究する」ということに感銘を受け、今の自分にはそれが足りないと感じました。あらためてこの塾で学びたい。

・空閑陽一郎…人間として成長したいと思っていた時に、



入塾にあたっての決意を披露する石井さん

塾長の話聞き、心が非常に熱くなりました。自分の生き方を30歳までには決めるという目標があるため、学びながら見定めたいと考えています。

・黒石涼…盛和塾で塾長と会ってから、女性としての生き方、人としての生き方を塾長に学ばせてもらいたいと考えました。

・武松翔平…塾長に弊社で講演をいただいた時のことです。塾長の本質的な話もさることながら、塾生の話も感銘を与えました。人として成長をしたい、塾生からも学びたいと思いました。

・林美智子…人として正しい生き方の追究、魂を磨くため、塾長から学びたいと思いました。

・前田香穂里…一流の方の考え方を学び、人間性を高めるために入塾します。

・松井一真…弊社での講演では塾長のパワフルさ、夢を実現させたプロセスに強く惹かれました。少しでもその考え方を身に付けたい。

・諸泉佳那子…塾長の生き方、考え方に憧れています。

・諸富英輔…盛和塾の学びを社内で共有していますが、塾長が弊社を訪れ、講演された奇跡から「生き方塾」に大変惹かれました。

・山本朱加莉…塾長の弊社での講演で、深い学びが得られるなど感じました。

・吉村千穂…心のレベルを高めていくため学びたいと思いました。人として正しいことを、日々の生活の中で、実践していけるよう、これを体現している塾長や塾生から吸収したいと思います。

・渡辺薫人…豊かな人生とは。その意味や方法について学びたい。

塾長講話

「生き方塾」の10の基本とは

● 「できない」は怠けの口実

—今日は最前列に若い方々の顔を見られて、心が弾んでいます。仲間になって下さってありがとうございます。私も皆さんから、沢山の学びを得られそうで、ワクワクしています。

1 昨年の秋、右目の失明を宣告され、手術しても成功する可能性は一割しかありません、と告げられました。左目は既にほとんど見えなくなっているの、右目が駄目になったら、死ぬしかないなあと思いつめていました。しかし、自死してしまったら、他人様に迷惑を掛けてしまうとも思っていました。

くよくよ悩んでも仕方ありません。わずかな可能性に賭け

ることにして、手術を受けることを決心しました。病室ではひたすら坐禅に打ち込んでいるうちに、この失明は神様から私に対して「もう少しスローダウンして動きなさい。たまには休養を取りなさい」というメッセージではないのか、と思えるようになり、全ては宇宙の意志にお任せという気分になりました。

ゆったりした気持ちで手術を受けたせいか、手術は奇跡的に上手くいき、失明だけは免れました。医者はついでに左目も見えるようにしましょうと、再手術しました。

とは言っても、視力は完全に回復したわけではなく、霧の

中で見ている感じなのです。それでも全盲の状態に比べれば、天国です。目は不自由でも、体そのものは異状がないから、前向きにやっつけていけるのです。

「生き方塾」には、10の基本があります。

一つ目は仏教に則った人間観で、「衆生本来仏なり」です。仏とは完全無欠な人を言います。人間はもともと仏の本質を持っているのです。多くの人は現世という荒波にもまれて、仏の芽が成長し切れていない。仏の道を行っても、時には道を踏み外す。そんな時はやり直せばいい。地獄、極楽は心の中にあり、現世では芽が出なくても、頑張っていれば、輪廻転生によって来世では仏になれるという楽天的な考え方です。

二つ目は皆さんのDNAに差はないということです。「自分は駄目だ」「自分は能力がない」などと口にする人がいますが、ノーベル賞をもらうような知的レベルの高い人と知的障害者とのDNAは、たった0.1%の差しかないのです。違うのは、DNAのスイッチが入っているかどうかです。多くのDNAは眠ったまま、使わないまま死ぬ人が多いのです。

ほとんどの人は、持って生まれたDNAのわずか3%しかオンにしないで死んでいくのです。あとの97%は眠ったまま。DNAの中にはがんのDNAなど悪さをするDNAもありますから、全てのスイッチが入る必要はありませんが、才能を眠らせたまま死んでいくのは実にもったいない話です。

「自分はできない」と結論を出したら、出来るわけはありません。その時点でDNAのスイッチを切ったわけですから。「できない」の結論は、怠けたいための言い訳なのです。DNAをオンにする方法は、いろいろありますが、最終的にDNA、遺伝子のスイッチを入れてくれるのは「愛」だ、と遺伝子学者は言っています。愛は利他です。他人に優しくすると、自分の心も安らぎを得て、救われるような気持ちになります。「情けは人のためならず」なのです。

三つ目は「前向きに考え、行動する」です。ネガティブな考えは、自分をネガティブにします。積極的な本心に強い思いは、必ず実現するものです。強い思いとは、潜在意識に浸透するほど、真剣なものです。

四つ目は、自分を取り巻く環境は、自分が作ったものという

● 判断基準は「人間として正しいこと」

六つ目は、行き詰った時や、迷いが出た場合は、「人間として正しいことは何か」という原点に戻るといことです。今、思うことは、リーダーと称される人やトップと位置付けられている人ほど、心が病んでいるという現実です。

東芝、三菱自動車など超一流企業は、目先の欲にかられて粉飾決算やデータ改ざんなどを行いました。公私混同をして引責辞任したのは舛添東京知事でした。こんな何でもありの時代ですから、悪魔のささやきも少なくありません。だからこそ、迷ったら深呼吸し、一時的には遠回りでも、「人間として正しいことは何か」を価値判断の基準として行動してほしいのです。

七つ目は、「いのちとは何か」「生きるとは何か」を考えてほしいのです。

では「いのち」とは何なのか？ 遺伝子学者の村上和夫先生は、「いのちは、38億年前に、一つの遺伝子から始まり、38

億年前には「因果必然の法則」があります。原因があって結果があるという考え方です。上司と折り合いが悪いというケースは良くあります。何となく馬が合わないと思っているうちはまだいいのですが、やがてそれが態度に出てくる。すると相手も「何だ、こいつは！」と疎ましく思ってくる。するとますます悪い方向へ傾いていきます。そこで発想を変えて、嫌いだけど挨拶ぐらいはしようかと考えて、「おはようございます」と挨拶します。初めのうちは、相手もギクシャクしていますが、毎日やっつけていけば、相手も挨拶に答えるようになります。そうなれば、あなたと上司の関係は好転します。相手を変えるには自分が変わればいいのです。

私たちは今、稲盛和夫さんの「生き方」を輪読していますが、稲盛さんも私と同じように、環境は自分の影みたいなものと言っています。この年齢まで生きてくると、様々な人の死に方を見ていますが、みんなその人らしい死に方をしているから不思議です。ひんしゆくを買うほどまでに、他人を蹴落として出世した人、あくどく金儲けした人は、誰にも看取られず惨めな寂しい死に方をしています。お金がなくても清く生きた人は、みんなが、その死を惜しみます。長いスパンで見れば、必ず「因果必然」となりますから、自棄を起こすことはありません。つまり、運命、宿命は変えられる、ということ。環境は自分の前世の結果、生き方の結果も関係していますから、いい考え方を、他人のために尽す、社会に貢献する、そうすると自分を取り巻く環境は良くなります。

五つ目は人生の成功には、方程式があります。これは稲盛さんが言っていることで、「人生の結果＝ものの考え方×熱意×能力」というものです。ものの考え方とは、利他とか利己といった価値観で、熱意は情熱、思いといったものです。この方程式は掛け算であり、能力が最後に来るところがミソです。

しかも、最初のものへの考え方はプラス百点からマイナス百点まであります。つまり、誤った考え方、マイナスの考え方なら結果は大きなマイナスとなって出てきます。例えば暴力団。組長は熱意があつて能力も十分なのですが、考え方はマイナスなので、大きなマイナスとなります。能力が十分あつても熱意や考え方が劣っているなら、結果は小さなものとなります。

億年の間に分裂を繰り返して、現在3千万種類の生物になった。人間もそのうちの一つでしかなく、魚も、花も、蝶も、象も、鳥も、ゴキブリも、そして人間も、先祖をたどっていくと、源は38億年前の一つの「いのち」にたどり着く。すべての生き物は、全く同じ遺伝子暗号を使って生きている。我々が日常生活で先祖と言うと、曾おじいさんぐらまで、家系図のある名家でも、せいぜい300年とか500年までしか辿れない。しかし、38億年をさかのぼった最初の先祖は、一つの遺伝子、一つの「いのち」に行き着く」と書いています。

ということは、単細胞の初期の生物から、人類のような高等動物まで、みんな先祖は同じであり、命はみんな繋がっているということなのです。3000万種の全生物は、皆、親戚ということなのです。中でも、人類同士は極めて近い兄弟のような存在なのです。人類同士は敵なのではなく、みんな親せきなのです。同じ「いのち」、一つの「いのち」を共有している

わけですから、仲良く地球の上で助け合って生きていくのが、本来の姿なのです。ですから、他人を殺すと言うことは、自分の命を殺すことと同じなのです。他人を殺すことは、命のつながりを切ることですから、自分を殺すことでもあるのです。

さらに、皆さんがこの世に生を受ける確率は、70兆分の1だそうです。これはジャンボ宝くじに、百万回連続当選するぐらいの奇跡的な確率なのです。お父さんの染色体は23個、お母さんの染色体も23個あります。これが掛け合わされて生まれる子どもの組み合わせパターンは70兆もあるそうです。あなたはその70兆もの組み合わせパターンの中から、一つだけ選ばれて生まれてきました。さらに、数億匹いる精子の一つだけが卵子と結びついて、受精卵になるのです。受精のプロセス、染色体の組み合わせパターンという高いハードルを乗り越えてきたあなたは、たった一つのかげがえのない“いのち”、エリート中のエリート、奇跡的存在なのです。「自分は能力がない」「自分は頭が悪い」などと、自分を大切にしない、自分を否定する人がいますが、これまで述べたように、この世に存在するだけで、すごいことなのです。

八つ目は、死生観です。難しい説明になるので、詳しくはいつか話したいと思っていますが、人生はあつという間に終わり、死は確率100%で誰にでもやってきます。生まれた時から死に向かって歩き始めるのです。エンディングを迎えた時、右往左往する人がいますが、人は決して死ぬものではありません。転生輪廻。つまり、死んであの世に行けば、魂は何度も生まれ変わって生きていけるのです。桜は満開の後、散ってしましますが、それでも翌年には花を咲かせます。そんな感じで、ドライラマ法王は「衣服を一枚脱いで、隣の部屋に行く感覚」と言っています。ですから、何ら死を恐れることはないのです。

九つ目は、「情報の洪水に飲み込まれない」ということです。知識の習得は大事なことですが、現代人は情報過多に沈没し



「生き方塾」とは、について語る下村塾長

ている気がしてなりません。無責任なフェイクニュースがインターネット上を飛び交い、一喜一憂しています。まず情報の選別、意味、正しいかどうか、優先順位などを考え、知識や情報は詰め込むだけでは駄目であって、それをどう還元させるかが大事なのです。得た知識や情報を血肉化して、実践に役立てる。それが要なのです。

最後は、「瞬間、瞬間を完全燃焼する」ということです。前向き、利他、ワクワクの人生を目指すには、今置かれている環境の中で一瞬、一瞬を完全燃焼し、ことに当たるしかありません。過ぎたことを悔やんでも戻ることはできないし、まだ来てもない明日のことを心配しても無意味なことです。今日の、今この瞬間を100%完全燃焼していけば、道は開いていきます。駄目だと思ったら駄目です。だって自分自身で前へ進むドアを閉じるわけですから。出来ないと思うことも同じです。諦めては絶対いけない。後ろを向いたら前にある扉が見えないから開けることはできません。ひたすら自分の可能性を信じて、100%完全燃焼させれば、夢や思いは必ず実ります。

特別上映「日本と再生」

● 原発再稼働は歴史に逆行

午後からは、河合弘之弁護士が監督し、原発が抱える問題を明らかにし、自然エネルギーの素晴らしさを説く映画「日本と再生」が上映されました。この映画の公式ホームページに掲載されているイントロダクションを紹介します。

——20年にわたって原発の危険を訴え、全国で原発差し止め訴訟を繰り広げてきた弁護士・河合弘之は、福島第一原発事故以降は、より一層、その活動に力を注いだ。国民に原発問題を理解してもらうために、自ら映画監督となり、原発問題映画「日本と原発」「日本と原発 4年後」まで制作した。複雑な原発問題の全体像を分かりやすく描いた原発問題映画は手応えがあった。原発差し止め訴訟でも、裁判所で上映をして、いくつか勝訴も勝ち取った。原発問題の理解が進んだのは良いが、映画上映会に合わせて講演会を日本各地で行うと、河合はそのたびに「原発を止めた後のエネルギーは確保できるのか」という問いに直面した。

河合は、再び思い立った。「原発を無くしたあと、自然エネルギーで十分にやっていけることが分かる映画を作ろう！」

河合は、20年来、自然エネルギーならこの人と信頼してきた飯田哲也を仲間に招き、河合と飯田の二人の旅が始まった。

二人は、北から南、西から東へと、日本と世界を駆け巡った。自然エネルギーの歴史を切り拓いたパイオニアを訪ね歩き、自然エネルギーの最前線で挑戦する人々を訪ね歩き、本作「日本と再生～光と風のギガワット作戦」を創りあげた。

本作は、今この瞬間に起きている世界のダイナミックな変化を描いている。自然エネルギーが実用化していることはもちろん、これほどまでに急速に普及し、大きな変化を起こしている現実を目の当たりにした河合は、大いに驚いた。

当然だろう。「人類史第四の革命」とさえ呼ばれる、ダイナミックかつ世界史的なエネルギー転換である。日本ではほとんど知られていない。それどころか、原発再稼働に固執する日本は、その大きな歴史的な変化に逆らい「逆走」している。河合は、その変化に背を向ける日本に、危機感を覚えた。

幸い、歴史は、周縁から地域から変わるという教訓のとおり、日本各地でさまざまな挑戦や希望の芽も生れつつある。エネ

ルギー転換の歴史を「逆走」している日本だが、今ならまだ間に合う。自然エネルギーへの変化は避けられないだけでなく、豊かな日本の未来を約束してくれるのだから——

映画上映が終わり、吉原毅城南信用金庫相談役の特別講演が始まる前に、下村塾長は次のようにコメントしました。

——私はジャーナリストですから、現代起こっているさまざまな問題について話しますが、今はちょうど、20世紀から21世紀への転換期にあるということです。20世紀は、「大きいことはいいことだ」の世紀で、一基当たり100万キロワット以上を発電する原発はまさにその象徴です。しかし、巨大すぎる設備だから送電ロスも大きく、さらに危険であることは福島事故を見てお分かりでしょう。21世紀はそれとは逆に「小さいことはいいことだ」の世紀です。

今皆さんと見たこの映画は、エネルギー問題ばかりでなく、新しい時代の暮らし方についても言及しています。この映画には、原発ゼロを訴えている小泉元総理も出ています。小泉さんは推進論者に



脱原発を目指す理由を説明するメルケルドイツ首相（「日本と再生」から）

だまされて原発を推進した反省にたつて、全国行脚をしています。この小泉さんを支援しているのが城南信用金庫の元理事長で、城南信金のシンクタンク、城南総研の所長、吉原毅さんです。吉原さんは歴代理事長が信金を私物化しているのをやめさせ、自分が理事長に就いてからは、60歳できっぱり身を引く潔い生き方をしている立派な方です。では、吉原さんの講演を聞きたいと思います——

特別講演 城南信用金庫相談役吉原毅さん

自然エネで世界は動いている

● 様々な利権が絡む原発

小泉純一郎元総理と二人三脚で「原発ゼロ・自然エネルギー社会」を目指している吉原毅・城南信金相談役は、「原発ゼロ・自然エネルギーで世界は動いている！」と題して、応援団講義をしました。講演のあらましは下記の通りです。

——懸賞付き定期預金は、城南信金が日本初の商品として1994年11月から始め、今や各金融機関も手掛けて大きな人気を集めていますが、販売に漕ぎ着けるまでは容易ではありませんでした。預金金利の自由化が始まったことを受け、1889年から商品開発に挑んだのですが、大蔵省（現財務省）は時期尚早と反対。大ゲンカのうえ、5年経ってようやく販売できた。その時から、私には「怖いもの」がなくなりました。

原発ビジネスを背骨にした原子力・ムラは、全世界にあり、原爆などの核兵器製造や暴力団ともつるんでいる得体の知れない世界です。先程上映した「日本と再生」は、原発がいかに生産性が低く、しかも将来展望が全くないビジネスであり、対極にある自然エネルギーがいかに経済発展、人間生活に貢献できるかを極めて分かりやすく紹介した映画です。この映画を見ると、なぜ政財官が一体となって、原発を進めているのが分からなくなってしまう。

原発に将来性はない。しかも原発のごみは無害になるまで10万年もかかり、安全な処分場もない。原発推進論者は、放射能ごみも、やがては無害になる技術が開発されると言います。本来なら、どうなるか分からない技術に投資する銀行はないのですが、推進側はなかなか「負け」を認めない。なぜそうなのか？

まず、原発には様々な利権が絡んでおり、原発がないと電力会社は潰れる経営構造になっています。原発が駄目になると、電力会社は債務超過に陥り、融資している大銀行もピンチになってしまいます。原発は巨大な装置産業だから、駄目になれば、鉄、コンクリートといった素材を生産供給している会

社も潰れてしまう。

私は経済学部で学びましたが、恩師は歴代総理のブレーンを務めた加藤寛教授でした。その加藤先生は、公共選択論を研究し、「人の幸せとは何か」を常に訴えていました。公共選択論とは、政治家や官僚を、自分の利益のために戦略的に行動するプレーヤーと捉え、彼らの社会・政治システム下での戦略的依存関係を分析する学問分野です。加藤先生は国鉄、電電公社、郵便の分割民営化を推進したほか、税制改革に尽力したことは広く知られていますが、その加藤先生は、「電力会社は、政官財が絡んだ巨大なモンスター、かつ利権集団であるのに、メスを入れるのを忘れてしまった」と、嘆いていました。

原発の燃料となるウラニウムの利権は、ロスチャイルド家が牛耳っており、原子爆弾の開発にはロスチャイルドとロックフェラー両財閥の大きな力が働いていました。原子爆弾の開発に必要な20兆円にも上るといわれる莫大な資金は、両財閥が提供した、とされています。

ロスチャイルド家は、核分裂が発見された時から、核分裂は将来、富をもたらすと思いつき、キュリー夫妻を援助し、アフリカのウラン鉱山を開発しました。第二次大戦の時、ロスチャイルド家は、敵同士のアメリカとドイツに原爆開発を売り込み、アメリカは原爆開発に、日本の敗戦は決まっていたのに、核兵器がどれほど凄まじい威力をもった兵器かを、国際社会に見せつけておく必要があったので、日本に原爆投下をさせたのです。

日本では最高法規が日本国憲法とされていますが、現実には、日米地位協定が憲法の上位にあり、さらにその上位に日米安全保障条約があります。民主党政権になった時、自然エネルギー推進を打ち出し、2012年には原発ゼロを閣議決定しようとしたけれど、アメリカは日米地位協定、安保条約を

持ち出して、「原発ゼロは駄目」と釘を刺し、民主党政権は閣議決定できなかつた経緯があります。

日本はアメリカにとって、一大ウラン消費国であるからです。アメリカ政府はマスコミを利用する世論操作が上手いから、気を付けなくてははいけない。スキャンダルをリークして報道させ、政敵を追い落とすわけだから、有名人のスキャンダルが暴露されている裏には、陰謀があるかもしれない、と疑う必要があると思います。

城南信金は115年前に誕生し、地域の中小企業に融資して、ともに成長しました。金融は産業を発展させる血液のような存在、いわば裏方であって、主役ではありません。

資本主義が進化すると、貧富の格差は拡大することは間違いなく、富者は必ず「貧者は努力が足りない」と強調します。しかし、格差がとてつもなく大きくなると、貧者はいくら努力しても貧困から抜け出せない社会構造ができてしまう。格差をほどほどのところで折り合いをつけるのが健全な保守主義なのですが、今は金融資本主義となって、金融が主役になっているから、保守主義もおかしな方向に走っている気がしてなりません。

金融資本主義の元祖で、今も君臨しているのは先程も少し触れたロスチャイルド家です。

およそ200年前、ロスチャイルド家は戦争金融を始めました。戦争を行うには多額の資金がいるから、資金需要は多いが、負ける国に金を貸したら返済できない。焦げ付いて回収できなくなるから、どの国が勝利するかを判断するために、自分だけの情報網を作らなければならない。フランクフルトが本家のロスチャイルド家は、そのために、ロンドン、パリ、ウィーン、ナポリに分家を設けて、金融と併行して情報集めに躍起となっていました。ナポレオン戦争の最後となった1815年のワーテルローの戦いは、イギリスを中心とする連合軍の勝利になりましたが、その戦争で、ロスチャイルド家は大量に儲けました。

当初はナポレオンが勝つと予想されていましたが、ナポレオンは敗北した。その情報をいち早く察知したロスチャイルド家は、わざとイギリスの国債を売りに出しました。すると市場は、連合軍が敗北したと間違った判断をして、我先にイギリス国債を売りに出した。そうなれば国債の価値は大きく下がり、底をついたと判断した時点で、ロスチャイルドは、今度は暴落したイギリス国債を、ただ同然の値段で買い占めた。その直後に、連合軍が勝利しナポレオンが敗北した知ら

せが入り、市場はイギリス国債の買い戻しに動きましたが、「時すでに遅し」でした。

情報網を駆使したロスチャイルド家の経営戦略は、莫大な富を同家にもたらしめました。日露戦争では日本の戦時国債を買い、アフリカのダイヤモンドもウラニウム同様、同家が牛耳っています。同家がグローバル化の先駆けと言っているでしょう。これが第1次グローバル化としましょう。この間、金融市場は拡大し続け、追従を許さない情報網は、ロスチャイルド家を不動のものとした。

今は第2次グローバル化の時代ですが、これには三大ポイントがあります。

まず、根底にあるのは、やはり情報です。かつては電信でしたが、今はIT、インターネットです。将来性を見込めるもの、サービスなどを見極め、そこに先行投資する。

次には、戦争、紛争の火種を見つけたら、戦いに必要な資材の原料を先物として買ってから、戦争を起こさせる。「川に落ちた犬を棒で叩け」という諺がありますが、困った人は助けない。困っている人を金融面で助けるのがコミュニティ・ファイナンスなのですが、マーケット・ファイナンスは、その逆です。1920年代、世界規模で経済恐慌が起きましたが、アメリカのモルガン家やロックフェラー家は、潰れた会社を捨て値で買い求め、景気が好転した時に高値で売って大儲けした。さすがにそれはやり過ぎだったから、政府も規制する法律を作りました。しかし、レーガン政権が誕生した1980年代から規制を緩和・撤廃する新自由主義が台頭して、各種の規制は取り払われてしまった。アメリカのこの動きは日本にも押し寄せ、1990年代には、金融ビッグバンと称して、銀行と証券会社の境界がないも同然となりました。銀行も投資信託を行えるようになったのです。日本は、アメリカの支配構造に組み込まれたわけだ。



原発を取り巻く情勢や転機に直面している
資本主義について語る吉原さん

● 原発に見切り付けたアメリカ

それが端的に分かったのが、2011年の原発事故でした。アメリカは原発に将来性がないことを見越し、原発プラントのウェスティング・ハウス社の売却先を探していました。そこに食いついたのが東芝でした。最初は2000億円で三菱重工が引き受けるはずだったが、東芝は8000億円で買収してしまいました。買収してみたら、この会社は大赤字を抱えているボロ会社だった。屑会社を売り抜けたアメリカの巨大資本は、またしても大儲けしました。将来性があるものを、アメリカが売るはずはないのだから、一歩下がって考えれば分かるはずなのに。ことほど左様に、この世は陰謀に満ち溢れ、

利権構造の中で、マインド・コントロールされているのが現実なのです。

そのマインド・コントロールの一例が、原発でしょう。原発は、安全でクリーンでコストがかからない、自然エネルギーは不安定でコストが高い、という言葉が、国民の頭に浸透しているけれど、これは全くのウソであることは、福島原発の事故であきらかになりました。先程の映画にもあったように、自然エネルギーが普及すれば世界は平和になり、不景気もなくなる。戦争の原因は、主としてエネルギーと食糧確保にあります。自然エネルギーは無限だから資源争奪とはバイバ



吉原さんの特別講演に耳を傾ける塾生たち

イできます。光のパネルは、地球上のどこにでもあるシリカを原料とするシリコンだから、老朽化すれば土に戻せます。しかもシリコン・パネルは、原発の寿命である40年間使えます。アルミや銅は溶かして再利用できる。後で紹介しますが、太陽光パネルの設置で、農作物の収穫量は飛躍するから、食糧確保も心配がなくなる。

デンマークの例。疲弊した農村は風力発電を導入し、売電したお金を農地整備に使い、さらに保守管理する農業者に賃金として支払う。これによって農村にいたることが魅力になり、若者も定着しています。

これは日本でもできます。資源エネルギー庁が出している原発の発電コストは、1キロワットあたり7～8円ですが、これには40年後の廃炉処理費や使用済み核燃料の保管・処理費も入っていない。放射能ごみの捨て場建設費も計上されていないし、そもそも、ごみの捨て場も決まっていない。原発事故収束に政府は20兆円かかると言っていますが、専門家は70～80兆円はかかるだろうと言っているし、融け落ちた核燃料の塊りであるデブリを取り出した後の処理方法はありません。100兆円でも足りないくらいです。にもかかわらず、アメリカから言い含められ、自然エネルギーはまだ高いとマインド・コントロールされているのが日本なのです。

ケニアの例。首都のナイロビで太陽光発電ソーラーシェアリングの実験をしています。砂漠の上に発電パネルを設置すると、日陰が生まれて発電もできる。発生した電気で日陰に水をまけば畑ができて、オアシスになる。農作物に強い直射日光は有害であり、ソーラーパネルでできる日陰は植物にやさしいわけです。食糧、エネルギー資源の一石二鳥だから、言うことなしです。

● 世界の潮目は変わっている ― 濱田さん持論述べる

吉原さんの講演に引き続いて、吉原さん、小泉さんらと共に、自然エネルギーを推進している「生き方塾」応援団の一人でもある濱田総一郎塾生（株式会社パスポート社長）が、次のような持論を話しました。

―当社では、13万5000キロワット、2万5000世帯分の再生エネルギーを提供しています。これからの時代は、小型電源を各地に置くスマート・グリッド社会が

これらの例は、日本でも通用します。自然エネルギーが地方創世の道であることを論文にまとめ雑誌に掲載したので、是非読んでほしい。この論文の要点は、地方創世は、農業を元気にすることなくして、考えられない。不安定な農業収入や高齢化、後継者不足など、日本の農村社会が抱える問題を解決できる切り札が「ソーラーシェアリング」。畑や水田など農地で農業を行いながら、農地の上空で太陽光発電を行うことで、太陽の恵みを分け合うもの。本来の農業収入に加えて、安定的な売電収入も見込めるために、農家の現金収入は10倍に増えるともいわれる画期的なシステムです。具体的には、農地上空3メートルにソーラーパネルをパイプで支えた構造物を設置します。作物への日射量を確保しながら、太陽光を農業と発電2対1の割合でシェアする。通常の農地と同じようにトラクターやコンバインも利用できるから、農作業に支障はありません。現に2016年3月末の時点で、全国では775の事例があり、初期投資した資金の10%の利回りに相当する売電収入を得ています。

日本には46万ヘクタールの農地があり、その一部は耕作放棄されています。太陽光をシェアすると、1ヘクタールあたり400キロワットの発電ができます。日本の全農地でソーラーシェアリングをすれば、原発1800基分の発電ができるのです。日中、太陽光発電をして、余った電力は原発28基分の能力がある揚水発電所に送り、夜はダムに揚げた水を使って発電する。そうすればバッテリーは要らない。原発ゼロ社会は10年もかからず、その気にさえなれば、1年でできます。自然エネルギーをテコにして、日本再生に努めたいと思っています――

理想です。この利点は、地域活性化の起爆剤になり、循環型社会のビジネスモデルにもなる。脱原発は、エネルギー政策の一部ですが、実はそれ以上の価値を生み出しています。農業の活性化や過疎対策はその一例であり、次世代型の新しい社会づくりに適しているのです。つまり、エネルギー分野で、世界の潮目は、大きくはっきりと変わっている、ということですから――